

『ご新造さん。あんたはえらいお人じゃ。あんたの顔を見ると、地獄で仏様に逢ったような気になる。わしはきのうから食べておらんで、お腹が減って困っているんで。一つお願だが、あんたの乳を飲ませてくださらんかい。ご新造さん…』老人は哀願するようにS女に向って頭を下げた。『あら、おじいちゃん、お腹がすいちゃ困るでしょう。私の乳でよかったら、沢山飲んでください。…』S女は老人が可愛想だと思ひ、何のはじらいもなく、着物の襟をひろげて、はち切れそうな乳房を出して老人に乳を与えた。老人は救われたようにS女にすがりついてむさぼるように乳を吸った。やがて十分も過ぎた頃『ああ、これで生き返ったようだ。有難や有難や…』と老人は口ごもりながらS女の手をしっかりと握りしめて頭を下げた。立ち去ろうとしたS女にあわてたように『ああ、これご新造さん、この包は重いから、あんた預ってくれないかい。あしたの朝またここに来やすからのう』といって紺の風呂敷包をS女に手渡した。S女は素直にその包を預って鎮守様へと急いだ。参詣して間もなく引き返して、さきの場所に来て見ると老人の影はなく、うずくまっていた場所にはその跡らしいものさえ、全然なくなっていた。

S女は老人から頼まれた包を家に持ち帰って神棚に供えておいた。勿論、老人に逢ったことのいきさつなど誰にも話さなかった。

翌朝、又昨日と同じ時刻に来て見たが、いつまで待っても老人は遂に現れなかった。それから一週間たった。S女はいろいろ考えた末、夫に事のいきさつを全部話した。夫は驚いて『お前が、日頃神信心があついたので、何か神様のお授けではないか。』と云って、その風呂敷包を開いて見ると、こは如何大判小判がぎっしりつまった財布だった。それからS女は何日も神参りをつづけて、その道すがら、老人に逢いたいものだ